デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2026年（令和8年）11月11日（水曜日）（19）

多文化共生を考える契機に



国際化進む八戸で3部作上映

映画祭のトーク企画で、目玉ゲストの一人が台湾の蕭美玲（しゃおめいりん）監督だ。招いたのは、親交のある八戸工業大感性デザイン学部の戴周杰（たいしゅうき）助教（33）。蕭監督のドキュメンタリー3部作を上映する戴助教は「移民の姿や、アイデンティティーの揺らぎを描いた代表作。外国人労働者が増える今の八戸で、多文化共生に理解を深めるきっかけになれば」と来場を呼びかける。

3部作のうち「落ちて行く凧（たこ）」は、蕭監督が留学先のフランスで中国人移民の子孫に話を聞き、祖国への郷愁を映し出したデビュー作。「雲の彼方（かなた）に」「平行世界」は、監督とフランス人の夫との間に生まれた、アスペルガー症候群の娘の視点を通じて家族関係や複雑化する国際社会を描く。

平行世界は3年前の山形国際ドキュメンタリー映画祭で高い評価を受け、日本映画監督協会賞を受賞。東北の映画・映像文化を研究する戴助教も、この映画祭に関わったのが縁で、蕭監督と交流を続けてきた。

3部作を一挙に特集上映するのは日本初となる。戴助教は「作品のテーマは家族の絆だけではなく、移民や国際結婚、障害者やハーフの子どもの社会的な立ち位置など、多様な観点が含まれている」と説明する。

自身は中国出身で11年前に来日。当初は「日本は好きだが、語学を懸命に学んでもネーティブの日本人にはなれない」と悩んだ。ただ、距離を置いて祖国の文化を見つめ直すうちに、中国人としてのアイデンティティーを大切にしたいと思うようになったという。

外国人労働者が増えている八戸で暮らす今、改めて「文化的背景の異なる人々が理解し合うため、私だからこそ果たせる役割がある」との思いをかみしめる。

18日は八戸市美術館で午後5時から「雲の彼方に」を上映。同7時半から「落ちて行く凧」を上映後、ミャンマー映画研究者で八戸高専助教の山本文子さんによるトークを行い、多文化共生などを考える。22日は南部会館で午後1時半から「平行世界」を上映後、蕭監督のトークを予定する。（佐藤周平）

※随時掲載



台湾から蕭美玲監督を招いて3部作を上映する戴周杰助教＝八戸市

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。